

**ERUDITI:
The CGCS
Journal of
Language
Research
and
Education**

Vol. 4, 2020

Eruditi: The CGCS Journal of Language Research and Education,
Vol. 4

Table of contents

Introduction ii

Guest Article

Yasuhiro Nakagawa 3-16

留学生は日本語学習に潜むステレオタイプをどう
捉えているか

How Do International Students Perceive Stereotypes Hidden
in Japanese Language Learning?

Introduction

We are happy to announce the publication of the fourth issue of *Eruditi: The CGCS Journal of Language Research and Education*. *Eruditi* is an annual peer-reviewed digital journal, established to promote research and teaching activities within the Center for Global Communication Strategies (hereafter “CGCS”) in the College of Arts/Graduate School of Arts and Sciences of The University of Tokyo. The journal also accepts guest contributions (under the same peer review guidelines).

The fourth issue features only one paper; it is devoted to an important topic of stereotypes in language education materials. As editors, we are happy that this fourth issue is seeing light, despite the organizational difficulties the journal has faced due to the COVID-19 pandemic and the resulting shift to the online education. With this in mind, we are all the more thankful to the author of the featured paper for the attentive work in response to the editorial and review processes.

We thank Hiroshi Nishinakamura and Bridget McGregor for their work with the editorial team in regard to the last year’s and this year’s issues. We also thank the anonymous reviewers who have collaborated with *Eruditi*.

Finally, we would like to take this opportunity to announce that the current editorial team has served its term and will be handing over its duties to a new team starting from the next issue.

Wishing everyone a safe year.

Ksenia Golovina
Ingrid Kaufmann
Alexandra Terashima

留学生は日本語学習に潜むステレオタイプをどう捉えているか How Do International Students Perceive Stereotypes Hidden in Japanese Language Learning?

中川康弘

Yasuhiro Nakagawa

Chuo University

(Received March 2020; Accepted July 2020)

Abstract

In the field of Japanese language education, there is still a strong tendency to depict culture as a singular phenomenon. People and things, in particular, are often explained in educational materials using stereotypes. In this study, I conducted an open-ended questionnaire using Japanese language teaching materials with a small class of international students, the majority of whom are from Western countries. The purpose of the study was to examine how stereotypes contained within the teaching materials, such as those relating to gender and nationality, were perceived by beginner-level exchange students.

The results revealed a mixture of neutral and negative opinions and responses. The findings indicated that although adult learners recognize the stereotypes, they tolerated them, sifted through the information, and proceeded with their learning, accepting the sentences as typical examples for the purpose of learning Japanese grammar and expressions. Regarding the question of whether teachers should discuss the topic of stereotypes, many students agreed, but some believed that it was not necessary. However, another concern arose between the attitude that teachers should not discuss stereotypes at all in class and the attitude that they should be employed excessively and whether such would invite students to scrutinize grammar rules and usage. Based on these findings, teaching materials should not be viewed only objectively as material for intellectual consumption; it is also important to consider them as a chance to present the various stereotypes that people encounter in everyday social situations in Japan. Accordingly, it is important to determine to what extent should stereotypes be used in time-limited courses that are focused on grammar learning.

Keywords:

Japanese language teaching materials, stereotypes, beginner-level exchange students, open-ended questionnaire

キーワード: 日本語教材, ステレオタイプ, 初級留学生, 自由記述アンケート

1 はじめに

言語文化を単一のものとする見方に疑問が投げかけられるようになって久しい。日本語教育学の議論においても、集団ではなく多様な個を重視した構成主義的な見方に立って研究を進めていくことが、研究者、実践者の間で共通理解になりつつある (cf. 田中 2016、中川 2018)。また日本語学習者の背景についても、海外の学習者数は 2018 年の時点で 142 の国・地域で過去最高の約 385 万人となり (国際交流基金 2019)、国内の学習者も留学生、外国人労働者、移動する子どもたちと多様化の傾向にある (文化庁 2018)。しかし、多くの実践現場では、言語能力の向上を第一の目的に、教材に登場する人物や事柄の単一性が見過ごされることも未だに多い。そしてその単一性は、往々にして言語文化のステレオタイプとして描かれるものとなる。実践現場でそうした状況が無意識に再生産される中、学習者、殊に日々の授業を通じて新しい文法項目、表現、語彙を学ぶ日本語初級レベルの大学留学生は、学習過程に潜むステレオタイプをどう捉え、解釈しているのだろうか。

2 日本語教育学におけるステレオタイプへの視座

新版日本語教育事典によると、ステレオタイプ (stereotype) という概念は、「人が特定の個人、集団、状況などを認知するときのいつの間にか用いている先入固定概念、過度に単純化された紋切り型の態度、意見、イメージなど (河野 2005: 515)」と定義される。そのうえで現場においては「教師も学習者も、それぞれが用いているステレオタイプを知り、修正し、相対化することが必要 (河野 2005: 516)」だとしている。ちなみに同事典の執筆者でもある河野は、日本事情教育におけるステレオタイプの扱いについても河野 (2002) で触れており、授業担当者がステレオタイプの発言をしないこと、学習者からのステレオタイプの発言にはその根拠を問いただすことの重要性を指摘している。

日本語教育の実践研究では、ステレオタイプをめぐって、主に教材とその扱い方についての議論がなされてきた。例えば熊谷 (2008a) は、初級日本語教科書『げんき』(The Japan Times) に潜む社会構造、言語規範、文化的価値等に対する作成者の思想を問題視した。そこでは、休日の過ごし方について、白人の留学生=観光旅行、アジア系学生=アルバイトに勤しむという、人種の違いに基づく人物役割があてられている点や、男性の日本人学生が女性留学生を呼び捨てにする一方、女性留学生には「〜くん」と呼ばせ、言葉遣いをめぐるジェンダー役割に偏りが見られる点等が指摘されている。そのうえで熊谷は、授業では単に日本語を学ぶだけではなく、ステレオタイプに触れ、気づきを与えることの必要性を述べた。なぜなら、教材を批判的に読むことが、既存の世界観や価値観を振り返り、それを形成している歴史性、政治性を読み解くことにつながるからである。長らくヨーロッパの言語教育政策を牽引してきたパイラム (2015) は、言語教育

は政治的であり、文化をクリティカルに認識する能力の育成が必要だと述べているが、この熊谷の指摘も、日本語教育を自己と社会との関わりを考える「教育」として位置づけている点で極めて重要だと考える。

ただし、ステレオタイプ的な内容に焦点をあてる教室活動は、学習者に標準的な内容の提供と一定の能力の定着を目的とする語学教材の存在を揺るがすことにもつながる。学習者に教材／教師不信を抱かせるリスクを危惧する日本語教師の声を明らかにしたのが、同著内の別章(熊谷 2008b)である。そこで熊谷は、教師がどう教材を扱うかについては教師自身の持つビリーフ(教育観)の影響が大きいとした。そのうえで、教材の役割、内容のすべてを「真実」として抱え、学習者に提示しようとする教師のビリーフそのものに再考を促している。

前述の熊谷の2つの論考を踏まえた杉森(秋本)(2015)は、『げんき』に潜むステレオタイプについて学習者がどう思っているか、授業における杉森自身とのやりとりを記した。杉森(秋本)は学習者との議論の過程から、白人とアジア人の扱い方の違いについての気づき等、クラスで多様な意見が出たことに触れている。だが、ステレオタイプを問題の前提としたQ&Aパターンであったことや、教師である杉森自身との直接的なやりとりが行われていたがゆえに、教師／学習者関係からくる遠慮が垣間見られたこと等、調査上の課題も示された。

なお、教科書に潜むステレオタイプの存在を可視化させるか否かを左右する教師のビリーフについては、丸山・小澤(2011)も言及している。丸山・小澤は、日本の高等教育機関で教える日本語教師11名を対象に、16点の読解教材にどのようなステレオタイプ的な要素が含まれているかを尋ねた。その結果、ステレオタイプを感じる教師の箇所には類似傾向が見られ、さらに、ステレオタイプへの意識可否はあくまで教師個人の体験によるところが大きいとした。この論考において、調査時点でステレオタイプ性を感じた理由についての記述を求めなかった点は課題としているが、丸山・小澤は、教材をどう扱うかより、どのような情報を扱い、それがステレオタイプ的情報である場合、どのように伝播を防ぐか、教材そのものの質の改善を考えることが重要であると結論づけている。

伊藤・保坂(2015)は、教科書は文法や表現の習得を目的としても無意識に文化を伝えているものだという立場から、初級教科書にある語句、表現、話題、談話構成、イラストについて、日本的な要素を持つと考えた事柄の分析を行っている。教科書には『みんなの日本語初級』(スリーエーネットワーク)と『テーマで学ぶ基礎日本語(NEJ)』(くろしお出版)を取り上げ、ドイツ、中国、韓国、ミャンマー出身の4名を対象に、インタビュー調査を通じて4名の学習者が「日本的な要素を持つ」と考えた事柄に着目した。その結果、『みんなの日本語初級』には、日本社会での典型的な表現や日本的な身振りや服装を表すイラストが用いられ、『テーマで学ぶ基礎日本語(NEJ)』には、テキストに埋め込まれている日常的な行動様式の違いに関する指摘が多いとする学習者の意見を示している。そのうえで、各教材の特徴を踏まえたクラス活動の可能性を探ることが重要だ

とした。さらに伊藤・保坂（2016）では、『できる日本語（初級本冊）』（アルク）と『まるごと（入門 A1）』（国際交流基金）に潜在する「社会規範」に着目し、会話例とイラストについてそれぞれ教材分析を行っている。このうち『できる日本語』には、学校生活での適切な振る舞いが示されているとし、その会話状況にある文化事象に着目して教えることの有効性を指摘した。一方、『まるごと』に対しては、多様な人物設定をしながらも、一般的な日本の社会規範に則ったステレオタイプ的な行動を教えようとしているという分析結果を示している。ただし、たとえステレオタイプ的な要素が含まれていたとしても、教師がステレオタイプ的な内容をクラスで顕在化させ、それを学びのリソースとして学習者と共有することが学習者に社会規範に対する気づかせる契機となり、結果的に活発な意見交換が可能になる教室活動につながっていくとしている。

これらの先行研究では、教科書が提示する情報のステレオタイプがどのような形で現れたか、また、それに対する教師の捉え方と指導上の扱いについて言及した示唆に富む。だが、取り上げた教材はいずれも高校、大学から社会人まで幅広い学習者を想定して作られた初級から中級にかけての教材である。学習者背景も曖昧であり、取り上げた教材について、どの国、地域、レベルの、どんな立場の学習者の意見が反映されているのか十分ではない。

よって、学習者の中でも、成人で知的レベルも高い大学生で、かつ日本語を学び始めたばかりの初級の交換留学生在が、日本の大学で日本語を学ぶ過程でステレオタイプをどう捉え、どんな授業を望んでいるかを調べるのには意義があると思われる。

3 研究の目的

本研究では、日本の大学で学ぶ日本語初級の留学生在がステレオタイプをどう解釈しているのかを探る。具体的には、小規模クラスの交換留学生在が、使用教材『みんなの日本語初級I』に潜むステレオタイプをどう捉えたか、その検討を試みることを目的とする。そして教材に潜むステレオタイプを、実践現場においてどう扱うかを考えるための序論的研究として、本稿を位置づける。

4 調査の概要

4.1 調査協力者

調査協力者は、都内某私立大学において日本語を学ぶ初級の交換留学生在 9 名（ドイツ 2、オーストラリア（非アジア系）1、フランス 3、イギリス 2、タイ 1）。平均年齢は 20 歳。初級クラスは交換留学生向けプログラムにのみ設置され、文法シラバスに基づき週 8 コマ複数教員が連携してあたっている。毎学期ほぼ欧米圏出身者で構成されることから、今回の協力者が選ばれたことに触れておく。

調査協力者である留学生の背景を表 1 に記す。

表 1 調査協力者の背景

番号	仮名	国籍	性別	専攻	留学期間
1	GM1	ドイツ	男性	法学	2018.9～2019.2
2	GM2	ドイツ	男性	法学	2018.9～2019.7
3	AF	オーストラリア	女性	文学	2018.9～2019.2
4	FF1	フランス	女性	文学	2018.9～2019.7
5	FF2	フランス	女性	文学	2018.9～2019.7
6	FM	フランス	男性	法学	2018.9～2019.7
7	BF	イギリス	女性	経済学	2018.9～2019.2
8	BM	イギリス	男性	文学	2018.9～2019.2
9	TM	タイ	男性	商学	2018.9～2019.7

4.2 調査方法

初級日本語コース（15週×1コマ（90分））では、『みんなの日本語初級I』第2版（2012年、スリーエーネットワーク）の1-25課を扱っている。調査は2018年の後期、筆者の担当するクラスにおいて、20課を過ぎた学期の後半の授業日に授業終盤の20分をあて、文型練習を一部示した自由記述アンケートを使用した（稿末の資料1参照）。フェイスシートにアンケート実施の趣旨を記し、調査参加可否の同意を得た後で、性別と国籍の記載を促した。

なお、自由記述アンケートを採用したのは、前述の杉森（秋本）（2015）で示された課題（ステレオタイプを前提とするQ&Aパターンや、教師／学習者の関係性による対面の遠慮等）が回避できると考えたからである。無論、教材のステレオタイプについて学習者がどう解釈しているかを目的とした研究であるため、そのバイアスがかかることを完全には避けることができない。

また、アンケート実施前に、ステレオタイプという概念自体が既知かどうかも確認した。留学生からは「日本人は親切だ」等の例がいくつか挙げられ、学習者9名全員がステレオタイプという概念をある程度理解、共有できていることがわかった。そしてアンケートにはステレオタイプが潜んでいるか確認するものでもあると伝え、その趣旨については手短かに説明するにとどめた。これにより問題を前提とする調査方法に出るバイアスは一定程度避けられ、また無記名でアンケートを行うことで、教師／学習者の関係性からくる対面上の影響も軽減されることが考えられる。

5 調査結果

調査の手順として、まず、Q1として『みんなの日本語初級I』のAの練習（第1課の練習Bより）と、Bの練習（第16課の練習Bより）の学習のねらいを確認するための問いを設定した。そしてAの練習はイラストを見ながら出身や所属を問う名詞文作成の練習であるということ、Bの練習は括弧内の言葉を使っ

てイラストにある人物を描写する文法練習であること等の補足説明を行った。次に、Q2 で A、B の練習から、言語以外に受け取れる情報があるかどうか問い、Q3 では教師が日本語の授業においてステレオタイプに触れることをどう思うかについて質問した。

5.1 教科書にある練習から











以下に Q2、Q3 の設問と回答を記す。なお、記述部分は留学生の母語でも可としたため、フランス語、タイ語で書かれたものについては日本語訳を付した。

なお、Q2 にある “message” という語には、隠れた「言説」(discourse) という意味も含んでおり、留学生がそれを意識しているか否かも問うていることに触れておく。

Q2 Please look at the exercises below. Do you notice any message other than language practice content in exercise A and B?

A 第1課 練習 B より

* 『みんなの日本語初級I』 第2版、p. 9、スリーエーネットワーク

例 ミラー	1) 山田	2) ワット	3) タワボン	4) シュミット
				
アメリカ	日本	イギリス	タイ	ドイツ
				
会社員	銀行員	先生	学生	会社員

1. 例： → ミラーさんは アメリカ人です。
 1) → 2) → 3) → 4) →

B 第16課 練習Bより

* 『みんなの日本語初級I』 第2版、p. 138、スリーエーネットワーク

8. 例1： マリアさんは どの 人ですか。(髪が 長い・きれい)
 ⇒ → あの 髪が 長くて、きれいな 人です。


例2： マリアさんの かばんは どれですか。(白い・大きい)
 → あの 白くて、大きい かばんです。

1) ミラーさんは どの 人ですか。
 (若い・背が 高い) →

2) ワットさんは どの 人ですか。
 (ダンスが、上手・すてき) →

3) ミラーさんの かばんは どれですか。
 (黒い・古い) →

4) カリナさんの かばんは どれですか。
 (赤い・小さい) →



上記 A、B への回答では、全員がステレオタイプについて触れている。このうち、教材に潜むステレオタイプに対して否定寄りの意見を記していたのは 5 名であった。表 2 にその記述部分を示す。

表 2 Q2 の回答：否定寄り意見

GM1	Small stereotypes: British person seems gentle.
FF1	Stereotypes about gender and nationalities.
FF2	国籍によるステレオタイプが過剰です。本が古いのではないかと思います。 (フランス語⇒日本語訳)
BF	More males are used as examples. There is only 1 woman. (About Q2 A)
BM	Why does America have to be represented by a “white male” person?

一方、ステレオタイプに対して中立寄りだと思われる意見も、表3のとおり4名に確認された。

表3 Q2の回答：中立寄り意見

GM2	Textbooks for adults: everybody will be able to understand simplification.
AF	May be - this question may use stereotypes about people of different countries. This could be done in a positive way or negative way.
FM	国民、性別のステレオタイプ。だが私は攻撃的だとは思わない。むしろ簡単に人物を見分け、言葉を学ぶ“面白い”やり方だと思う。何か隠されたメッセージを伝えたいという意図はない。(フランス語⇒日本語訳)
TM	絵は理解を助ける。でも“タワポン”(人物設定でタイの学生)の絵はアジア一般で、タイ人とは思えない。(タイ語⇒日本語訳)

次に、教師の扱い方についてのQ3の設問と、その回答を示す。

Q3 Do you think that the Japanese language teacher should address the subjects that you wrote in Q2 in class?

表4 Q3の回答：教師がステレオタイプを扱うか否かに関する意見

Strongly agree: 1名	
BF	Gender equality.
Agree: 4名	
GM1	Could be useful.
FF2	全く触れないのは疑問。でも一言言えばわかるはず。(フランス語⇒日本語訳)
FF1	Just show different sentences possible without stereotypes. Because these stereotypes can be harmful and bring discrimination.
BM	Helps understand the reality of the place we work and study in.
Disagree: 2名	
GM2	Not important for study.
FM	重要ではないから。(フランス語⇒日本語訳)

回答者は7名で、「強く同意する」が1名、「同意する」が4名、「同意しない」が2名であった。オーストラリアとタイの留学生は無回答であった。

6 考察

まず、Q2において、問題意識の向け方に個人差はあったものの、否定寄り意見の5名からは、ジェンダー役割の固定化や国籍のイメージからくるステレオタイプに関する回答が出された (e.g., **FF1**: Stereotypes about gender and nationalities. / **BM**: Why does America have to be represented by a “white male” person?). これらの意見は、日本語学習においては、提示された例文の理解や文完成練習のほうに視点が注がれ、ともすれば見過ごされてしまう些細なものである。しかし、些細であるからこそ、教室の日常風景となって留学生にステレオタイプを強化させていく可能性が潜んでいることがわかり、FF1 と BM はその点に否定的な評価をしたのではないかと思われる。

一方、中立寄り意見は4名で、ステレオタイプの良し悪しについて客観的に言及したもの (e.g., **AF**: May be - this question may use stereotypes about people of different countries. This could be done in a positive way or negative way.)、成人向けの教材であり、理解しやすいように単純化されたもの (e.g., **GM2**: Textbooks for adults: everybody will be able to understand simplification.)、また、言語学習促進のための典型例であると認識し、そこに害はないと考えるもの (e.g., **FM**: 国民、性別のステレオタイプ。だが私は攻撃的だとは思わない。むしろ簡単に人物を見分け、言葉を学ぶ“面白い”やり方だと思う。何か隠されたメッセージを伝えたいという意図はない。) 等の記述が確認された。ここから、4名の留学生はステレオタイプ的な内容を「ステレオタイプ」だと認識したうえで、各人が情報を取捨選択していたことがわかった。GM2 や FM のようにステレオタイプに意識を向けつつも、それを許容し、惑わされることなく、自らのペースで学習に勤しむ成人の学習者もいることがわかる。

しかし、9名中5名の留学生が否定寄り意見だったという事実は、やはり見過ごしてはならないだろう。程度の違いこそあれ、ステレオタイプに嫌悪感を抱く留学生は少なからず教室に存在していることが、この結果で確認されたからである。また中立寄り意見の4名も、教材に含まれるステレオタイプに、果たしてどこまで惑わされることなくいられるか疑問である。練習で学んだ定型表現の一つとして日常の日本語使用場面で無意識に産出される可能性や周囲に及ぼす影響も否定できないからである。

では、教師はステレオタイプをどう扱えばよいのだろうか。次に、教材に潜むステレオタイプに対する教師の扱い方について触れた Q3 の結果を見ていく。

Q3 では、「強く同意する」、「同意する」と回答した者が合わせて5名いた。これらの考えを汲んだ場合、日本語教師はコース開始時にシラバスの特徴やステレオタイプの潜在性を明示化するのが望ましいと思われる。一例を挙げれば、クラスで唯一のアジア圏出身であるタイの留学生 (TM) が記した、登場人物のイラストが「タイ人と思えない」という「当事者の立場」(杉森 (秋本) 2015: 41) のコメントは、アジアについてあまり予備知識のない欧米圏出身の初級交換留

学生にとって、アジア圏への意識を向けるトピックとして有益だと考える。コースの目的によるが、タイ出身留学生に「タイ人と思えない」と言わせるまでのイラストがなぜ提示されているのか、また日本とその周辺国の位置や関係性等についての議論を日本語学習として盛り込めば、ステレオタイプへの意識も高まることが考えられるからである。

一方で、「同意しない」と回答した者も2名の立場を考えてみたい。2名の回答はGM2の“Not important for study”と、FMの「重要ではないから」というものであった。Q2では、2名とも中立寄り意見の立場だった者である。先行研究で触れたように、熊谷(2008a, b)では、初級日本語教科書『げんき』に潜む会話相手の役割関係や例文の典型にステレオタイプが含まれることを指摘していた。だが2名の回答は、学習言語の語彙や文法、表現を導入する場合、そうした典型例があって習得が進むという側面もあるのではないかと思わせるものである。

なるほど、ジェンダーや国籍の問題を取り立て、議論するのは、多様性を謳う今日において重要である。しかし、成人学習者の場合、それはもはや日常生活からかけ離れた「フィクション」に過ぎないということを理解しているとも読み取れる。期間が限定された交換留学生の場合、ステレオタイプが潜んでいても日本語学習に専心したいという意識が強く、典型例があって習得が進むという考え方も一理あるように思える。

だが、果たして、それで本当にステレオタイプが強化されることはないのだろうか。ステレオタイプを含む例文に触れ、練習問題を解き、表現を身につける中で、知らず知らずのうちにジェンダーや国籍の偏りが浸透していくのではないだろうか。それは“Not important for study”とステレオタイプを客観視していたGM2も同様だろう。よって、日本語学習の過程で現れるステレオタイプを看過してはならず、やはり授業においてそれを取り込むことが望ましいと考える。

以上を踏まえて、教師の態度について触れたい。

教師は確かに、ステレオタイプに過度に触れる、あるいは無計画かつ安易な扱いは、慎まなければならない。熊谷(2008b)では学習者の教材不信を危惧する現場の声が示されたが、加えて、必要な語彙、文法学習を軽視したり、必要以上に教材の粗探しをしたりすれば、日本語習得という本来の目的がずれてしまう懸念も出てくるからである。しかし一方で、ステレオタイプに触れないのは黙認行為であり、同意の表明と同等であるという点で取るべきではないとも考える。ステレオタイプを扱うことによる実践への影響と、扱わないことによる教育上の弊害という隘路に陥らないようにするために、教師はどうしたらよいか。

前述の新版日本語教育事典には、「教師も学習者も、それぞれが用いているステレオタイプを知り、修正し、相対化することが必要(河野 2005: 516)」とある。よってここから、教師は、ステレオタイプを教養の素材として客観視するにとどめず、自らの社会的現実を引き寄せる観点を持ち込む意識を常に持つておくことが望ましいだろう。例えば、留学生が日本ででの日常生活で感じた些細なステレ

オタイプを振り返り、それを教室において議論のテーマとして発展させることができるような実践方法である。本研究の対象であった交換留学生クラスのように、期間が限定された文法シラバスの連携初級コースでどこまで可能かは議論を要するが、教材に示されているステレオタイプを客観視し、批評するにとどまらず、自分事として扱い、日本語学習につなげていくことが、日本語教育の実践の場で重要だと考える。

7 おわりに

教材に潜むステレオタイプに対して、留学生に否定寄りと中立寄り意見の混在が見られた本研究から、日本語教育、殊に初級レベルの授業においてステレオタイプをどう捉え、授業で扱うかについて一定の答えが得られた。言うまでもなく、文化への洞察力は言語学習を通じて養われ、多様な社会におけるコミュニケーションのあり方を考えることにつながる。よって、ステレオタイプを教養の素材として客観視するにとどめず、留学生一人ひとりの生活文脈に引き寄せる観点を取り入れることの重要性が、本研究から導き出されたと考える。

冒頭でも触れたが、言語文化を単一のものとする見方に疑問が投げかけられ、また学習者の背景も多様化しているのが現在の日本語教育のパラダイムである。よって、新たに作られる教材は、ステレオタイプを許容するものではなく、社会の事情を正確に伝える責任があるだろう。そして、それを現場の第一線で使用する教師もまた、教材の内容を分析し、ステレオタイプ的な情報が含まれれば、それを言語の教育としていかに盛り込むかを考えることが求められる。

今回は調査協力者が 9 名に限定され、無記名でのアンケートゆえ記述内容に関して聞き取りを行うことはできなかった。プログラムの関係上、留学生の出身国・地域が欧米圏に限定されていたことも、データ収集の面で不十分だった点は否めない。今後はアジア圏等より多くの出身国・地域の留学生を念頭に置いて引き続き調査を行い、また、留学生のみならず多様な背景を持つ日本語学習者への調査可能性を模索しながら、教材の授業での扱い方を検討していくことを課題としたい。

付記：

本稿は、2019 年 10 月に行われた第 16 回マレーシア日本語教育国際研究発表会（マラヤ大学）での発表内容を、会場からのフィードバックを反映させて大幅に加筆したものである。

参考文献

- (1)伊藤誓子・保坂敏子 (2015)「言語と文化の媒介物としての教科書」『ヨーロッパ日本語教育』19, 283-284, ヨーロッパ日本語教師会
- (2)伊藤誓子・保坂敏子 (2016)「初級教科書の対話に埋め込まれた社会規範—社会文化行動に注目して—」『ヨーロッパ日本語教育』20, 411-412, ヨーロッパ日本語教師会
- (3)熊谷由理 (2008a)「日本語を学ぶ」ということ-日本語の教科書を批判的に読む」佐藤慎司, ドーア根理子 (編)『文化、ことば、教育—日本語／日本の教育の「標準」を越えて』, 130-150, 明石書店
- (4)熊谷由理 (2008b)「日本語教室におけることばと文化の標準化過程—教師・学生間の相互行為の分析から」佐藤慎司, ドーア根理子 (編)『文化、ことば、教育-日本語／日本の教育の「標準」を越えて』, 212-238, 明石書店
- (5)河野理恵 (2002)「ステレオタイプと日本事情教育」『一橋大学留学生センター紀要』第5号, 39-50.
- (6)河野理恵 (2005)「ステレオタイプ論と日本語教育」『新版日本語教育事典』, 515-516, 大修館書店
- (7)国際交流基金 (2019) 2018 年度海外日本語教育機関調査
<https://www.jpf.go.jp/j/about/press/2019/029.html> (2020.6.5 アクセス)
- (8)杉森 (秋本) 典子 (2015)「「メアリーはたけしを愛していない」—初級日本語教科書のイデオロギーについてのディスカッション」『リテラシーズ』16, 33-45, くろしお出版
- (9)田中里奈 (2016)『言語教育における言語・国籍・血統—在韓「在日コリアン」日本語教師のライフストーリー研究』, 明石書店
- (10)中川康弘 (2018)「留学生は学内でどのように自己存在を示そうとしているか—「まなざし」と対峙する学部留学生の語りから」, 『留学生教育』第23号, 留学生教育学会, 34-43.
- (11)バイラム, マイケル (2015)『相互文化的能力を育む外国語教育—グローバル時代の市民性形成をめざして』, 細川英雄監修, 山田悦子, 古村由美子訳, 大修館書店
- (12)文化庁 (2018)「平成30年度国内の日本語教育の概要」
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/h30/
(2020.6.18 アクセス)
- (13)丸山千歌・小澤伊久美 (2011)「日本語教科書に見られるステレオタイプを日本語教師はどうとらえたか—多様な日本語学習者への実践経験を持つ日本語教師へのパイロットスタディー」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』18, 33-52.

資料 1

Request for cooperation in the research on Japanese textbooks

The purpose of this questionnaire is to find out what international students are paying attention to regarding content of Japanese textbooks.

This questionnaire is anonymous. No personal information is required, and you only need to fill in your gender and nationality. I will comply with confidentiality when publishing results. Your evaluation or grades will not be affected by the answers you give in this questionnaire.

I hope you understand the above and answer all the questions below.

*Please put .











Male

Female

Nationality: _____

Q 1 Please look at the exercises below. From A and B what can you learn?

A: _____

例 ミラー  アメリカ  かいしゃいん 会社員	1) ^{やまだ} 山田  日本  ぎんこういん 銀行員	2) ワット  イギリス  せんせい 先生	3) タワボン  タイ  がくせい 学生	4) シュミット  ドイツ  かいしゃいん 会社員
---	---	--	---	--

1. 例: → ミラーさんは アメリカ^{じん}人です。
 ↑ 1) → 2) → 3) → 4) →

B: _____

8. 例1: マリアさんは どの 人ですか。(髪が 長い・きれい)
⇒ → あの 髪が 長くて、きれいな 人です。

例2: マリアさんの かばんは どれですか。(白い・大きい)
→ あの 白くて、大きい かばんです。

- 1) ミラーさんは どの 人ですか。
(若い・背が 高い) →
- 2) ワットさんは どの 人ですか。
(ダンスが、上手・すてき) →
- 3) ミラーさんの かばんは どれですか。
(黒い・古い) →
- 4) カリナさんの かばんは どれですか。
(赤い・小さい) →



Q2 Do you notice any message other than language practice content in exercise A and B?

Q3 Do you think that the Japanese language teacher should address the subjects that you wrote in Q 2 in class?

- Strongly agree
- Agree
- Disagree
- Strongly disagree

Why? _____

If you have any other comments or opinions that you can share with me, please describe in below form. I will read this carefully. Thank you.

ありがとうございました!

Eruditi

The CGCS Journal of
Language Research and Education

Vol. 4

August 2020

Editors

Ksenia Golovina

Ingrid Kaufmann

Alexandra Terashima

Published by

Center for Global Communication Strategies

College of Arts & Sciences

The University of Tokyo, Komaba

3-8-1 Komaba, Meguro-ku

Tokyo 153-8902, Japan

www.cgcs.c.u-tokyo.ac.jp/eru/